芸能のグローバルな伝播・発展に関する研究動向

近年の人類学では、グローバル化が進んだ現代社会における人・モノ・情報などの移動に伴った文化や宗教の動態に関する研究が盛んに行われている。世界各地に伝わる地域固有の音楽・舞踊文化に関する芸能研究においても、従来は芸能自体の構造や実演家たちの社会関係といった当該社会におけるミクロな分析が中心であったが、今日では越境の問題にも関心が向けられている。筆者が研究を進めるインド芸能を例にあげれば、1990 年代以降、IT 産業などに携わるインド人富裕層の大規模な移動・移住によって、欧米各地に在外インド人コミュニティが形成され、インドの音楽・舞踊文化のグローバルな需要が高まっていることが報告されている。

ここでは、英領植民地時代からインド系移民が数多く居住しているシンガポールにおいて、これまであまり注目されてこなかったインドの音楽・舞踊文化の実態を取り上げ、その継承・発展をめぐる近年の研究や動向について紹介したい。

インド芸能の伝播と発展：シンガポール

シンガポールにおけるインド芸能の歴史を紐解くと、19 世紀の英領マラヤ（現シンガポールとマレーシア）に流入したインド系移民のなかに、南インド出身のデーヴァダーシー（神の召使）という寺院付きの女性芸能者が存在し、彼女たちを介してインド芸能が伝播したことが最近の研究で明らかになった。

ただし、シンガポールにインド芸能が本格的に浸透するのは、1950 年代以降のことである。インド系コミュニティの招聘のもとで、ゴーパル・シェティやクマリ・カマラといった著名なインド人実演家による芸能公演が行われるようになると、インド系移民の子供たちの間ではインド音楽や舞踊に対する関心が高まっていった。このことが契機となり、公演のために訪れたインド人実演家の協力のもと、インド系移民の間で、インド芸能を伝承・実演する機関が相次いで設立された。代表的なものには、シンガポール・インド芸術協会（1949 年、以下 SIFAS）やバスカーズ・アーツ・アカデミー（1952 年）、アプサラ・アーツ（1977 年）などがあり、今日ではシンガポール国立大学芸術センター内にもインドの音楽・舞踊を教授するコースが開講されている。インド系移民たちは、それらの機関へ子女を通わせることで、故国の伝統的な音楽・舞踊文化とのつながりを強化していった。

こうしたシンガポールにおけるインド芸能の動向に関する研究は、いまだ本格的になされていないが、2015 年に SIFAS が刊行した *Kala Manjari: 50 years of Indian Classical Music and Dance in Singapore*（S. Ramaswami and S. Alukar-Sriram 編）は注目に値する。昨年 8 月に独立 50 周年を迎えたシンガポールでは、各種記念式典や芸術イベントの開催はもとより、シンガポールの近現代史に関する書籍がこぞって出版された。前掲書もその一つと言えるが、その内容は、20 世紀に活躍したインド人実演家や芸能関係者へのインタビューと、かれらが所有する記録資料をもとに構成されており、シンガポールにおけるインド芸能の歴史的動態を示す貴重な資料であることに疑いはない。また同書は、いかに政府やメディア、ヒンドゥー寺院やインド人コミュニティがシンガポールにおけるインドの古典音楽や舞踊を奨励してきたのかを詳述してもいる。

芸術文化政策と文化遺産行政

多民族国家シンガポールは、経済発展を遂げた 1990 年代以降から創造都市という標語を掲げ、芸術文化に重点を置く政策を推進している。たとえば、政府の支援のもとで、2002 年から毎年デーパヴァリ（光の祭典）の時期に開催されているカラ・ウルサヴァム（芸能祭）は、国内最大規模のインド芸能祭に発展し、世界的に活躍するインド人実演家が国内外から招聘され、古典からコンテンポラリーまでの多様なジャンルの芸能を披露している。

一方、国家遺産局のもとには、中国系、マレー系、インド系の各コミュニティが継承する伝統文化を保護・奨励するヘリテージ・センターが設立されている。2015 年 5 月、リトル・インディア地区にオープンしたインド・ヘリテージ・センターは、東南アジアでは初めてのインド系コミュニティの文化遺産に焦点をあてた博物館である。館内には、紀元 1 世紀から現在に至るまでの時代を網羅したインド文化に関する展示がなされ、インド亜大陸と東南アジアとの歴史的なつながりやシンガポールにおける南アジア系移民の多様性とその歴史が示されている。同センターの目的は、インド系コミュニティの文化発展に寄与するステークホルダーとの関係構築や共同事業、グローバル・マーケットの戦略的な開拓、ナショナルなインド文化の価値をさらに高めるための調査研究などである。また、過去にシンガポールで行われたインド芸能の公演記録と映像資料のデータベース化や、関係者へのインタビュー記録をデジタル・アーカイブ化する作業も進めている。

インドの音楽・舞踊文化は、歴史的背景から人の移動に伴う形でシンガポール社会に伝わり、一方ではシンガポールの「ナショナル」な文化として国家と密接に結びつき、他方ではインドはもとよりグローバルに活躍するインド人実演家たちとの交流を深めながら、今日まで発展を遂げてきた。それは、地域固有の芸能がグローバルな文脈でいかなる価値づけがなされているのかという、伝統文化をめぐる現代性の一端を垣間見せるだけでなく、グローバル化が進む現代社会において、芸術文化がいかに国家や経済と緊密な関係にあるのかを示す格好の事例と言えるだろう。それはまた、今日看過できない芸能のグローバル化と変容を考える上で多くの示唆を与えてもくれる。

SIFAS で開講されているクラスの光景。南インド古典音楽の編成の一つであるムリダンガムを教授する指導者と受講生（2012 年 8 月、シンガポール）。

文・写真　竹村嘉晃

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター研究員／南アジア地域研究国立民族学博物館拠点研究員。専門は芸能人類学、南アジア地域研究。著書に「『伝統』を支える多元的位相──シンガポールにおけるインド舞踊の発展と国家」（『舞踊学』第 38 号 2016 年）や『神霊を生きること、その世界──インド・ケーララ社会における「不可触民」の芸能民族誌』（風響社 2015 年）などがある。